

「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

第4組 極樂寺住職

## 巖城 孝憲

text by Takanori Iwaki

### 第9章「ひとえに他力にして」

この第九章は、宗祖と唯円の間答対話の形式をとっている。後の第十三章の宿業に関しても師弟の間答であり、先の第二章もまた、関東からいのちがけて上京してきた門弟たちを前にした宗祖との対話の場面であったことが推測される。この第九章は、第十三章の論難と説得、第二章の緊迫した場面とは全く状況が違い、同じ問いを共有するところに結ばれた深い師弟のきずなが感ぜられ、『歎異抄』を手にする人で、胸を打たれない人は一人もないほどの場面となっている。しかしながら、機法二種深信を信心の内容とする如来の教説が、「煩惱具足の凡夫」の自覚を深く促しているのであり、共有する同じ問いは、非常に厳しい自己凝視の一点に起こっている。救われないという機の自覚が法の成就する場となるように、いのちの目覚めの法はいつも逆説である。第三章の「善人なをもて佳生をとぐ、いわんや悪人をや」という逆説、そして今ここにもまた、「天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ佳生は一定とおもいたまうべきなり」という逆説的表現が語られる。

一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して、出離の縁あることなし」と信ず。二つには決定し

て深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。 (聖典二一五～六頁)

「出離の縁」あることのない「罪惡生死の凡夫」が、「かの願力に乗じて、定んで往生を得」という逆説。他力回向の法は、自力無効の自覚の起こる場を出遇いの場とする。人間の知恵だけを依り所として生きてきた自己を、人間であることの自己の本来性を回復するには、逆説を必要とする。今ここに、「よろこぶべきところをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり」とあり、煩惱具足というわが身の事実の自覚が、他力回向の法との出遇いに必要なのである。

その煩惱の内実が、『教行信証』「信巻」には、「愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して」と、自己を悲嘆する言葉として示されており、また、「踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬ」ことは『教行信証』の言葉では、「定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快(たの)しまざる」という表現で示されていることが古来より明らかにされている。

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快(たの)しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。 (聖典二五一頁)

「煩惱具足の凡夫」ということは、「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」(第一章)と言われ、また、次のように意味が押さえられている。

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。 (聖典五四五頁)

「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば」と衆生の機の自覚をうながし、「他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」と本願に帰したうなづきが語られる。本願の世界の中に、確かに自己が見出された自覚が、「煩惱具足の凡夫」であり、そのことが同時に、本願との出遇いに他ならない。